白楽天
さねもり
あふひ
柏崎
とくさ
四

# 白楽天

抑是ハ唐の太子乃賓客白楽天とハ我事也扨も是より東よ當つて國ありを日本と名づく急ぎ彼土にわたり日本の智恵をはかれとの宣旨に任せ唯今海路に趣候

舟漕出て日のもとのそ

其方乃国を尋ん東海の波路
はるかよ行舟乃ゆく浪よ入日の影
残る雲の旗手乃天津空月まる
出る其方より山みしまらぬちく程も
あく日本の地も見へよきりく
海路をへて息作程よ身へちや日
本の地よ着て猶此所よ残を見

日本のやうすを詠めもやと思作
志らぬひ乃筑紫の海の月ほのき
月乃み残る気色の脈　湖水満き
とうて碧浪天をひたし都を辞さし
きんきいか扁舟よ棹をうつを見る
五湖の煙乃浪のよかりやとおりひき
れかり蒼面白の海よあるやまわ　松浦かたい

西は山東は有明乃月の入雲も
浮かむや渺漫々たひようかうたる
さ海ざさい海ハてわか唐土の舟路乃
掠れも来をかつて辺夜泊りと関かつるよ
月も猶あかきらるく　これ
萬里の波濤をこきつ日本乃地よ
きつきぬ是は小船一艘浮かびされ

漁翁也いかにあれ成ハ日本乃者か
さん候ハ日本の漁翁にて候御身ハ
唐の白楽天にてましますなり
ふしぎやな始めて此土に渡りたるを白
楽天とみるハ何の故そてあるや説
其身ハ漢土の人なれ共名ハさきたつ
て日本に其名ハ隠れなきなれハさあり

たとひ其名を聞ゆるとも、それとしや
うそ見知らぬべきいはれ思はれをと
日本の智恵をはからんとて楽天来り
給ふべきとの沙汰はあまねき日の本
の西を詠めて唐の方より船のよるを
まち人毎にそれやかれぞとこゝろつ
くしは今や〳〵と松浦舟



沖をもみてかくれなき唐土船の
人を楽天とみるより行かひそめなる
べき理やとはやく唐人あれは
汝言葉をなもとてもいやもちらへ漁翁
よしや釣棹の暇なや釣たれん
扨て尋ぬべき事のあり舟をとゞめよ漁翁
いかに漁翁扨此ごろ日本には何事を

遊ばう　【シテ】「扨唐土にハ何を遊ひ給ふ
作れそ　【ワキ】「唐土にハ詩を作つて遊ぶよ
【シテ】「日本にハ歌をよみて人の心を慰む
【ワキ】「哥も哥と云ハよ　【シテ】「夫天竺の霊
文を唐土の詩賦とし。唐土の詩賦を
以て我朝の歌とす。されば三国を
やはらげきたるを以て大きにやはらぐと

書いて大和歌とよめり。しかれ
ども老翁の心を慰まんため作れば
【ワキ】「いや其儀にてハなし。白楽天ハ目前
の景色を詩に作つてゆうきやう。青
苔衣をおびていはほの肩に掛り
白雲帯に似て山の腰をめぐる心は
いかに漁翁　【シテ】「青苔衣を帯き

若の巖乃扉よかくるゝか哀れ似
たりとも白雲帯に似たる山の腰を
めくれる面白しく日本の歌もたゞ
是ぞよ若き哀れなる岩ほハありとも
てきあく山の帯をとるか　かつさ
やある是ぞ又見あきい漁翁所かゝ心
ある詠歌をつゞめる是ぞハかや成

シテ
人や悦ん　人かまゝやあありのをまつさ
者ありけ和歌を讃るのみ人間の
こゝよ限る人うらしまとしける者毎よ
歌を讃ぬハあるそれを　つきもやいき
としけるものともに掛たる數畜れ
近も　和歌を詠ざる是ハなし
和国のよきかれ　證歌多し　好なる

帝鶯ぱ水にもとめる蛙迄。唐土ハ知らす
日本にハ哥を詠じて翁も。文和哥をと
もつはらと読あり柳うぐひ
すの哥をよみたりける謂ハ春鶯
天皇の御宇かとよ大和国高天寺
すむ人のはつさ梅の花乃比に聞の
梅に鶯入来りて鳴声をきけば初

陽毎朝来不相見還本栖となく文
字に写して是をミれハ。三十一文字
乃詠哥乃言葉ありしとかや初陽
春あした毎にハ来れどもあはでぞかへる
もと乃栖と聞えつる鶯の声
を始として其の外禽獣畜類乃人
にたぐへて哥をよまぬためし多く

ありそ海乃濱の眞砂乃數々よ生
としいきる物何れも哥をよまざり
實や和国の風俗の心有る海
士人の云ふ有難き習ひなれ　迚和
国のあて遊び和歌をもつて舞
歌の曲具をくを顯はし　地「そもや
かゝる遊びとはいふやくゝは郎部ん



誰ちくとても吉陀んをよ我らがやう
は此舞楽の鞁ら浪の音笛は龍
乃吟ずる聲。舞人は此射が老の
あるゝ乃上よ立ちつゝ。青海よ浮ひつゝ海
青楽をまふとかや　上「[illegible]　地「国も
動かじ萬代迄よ　山陰のつゝう
水の青き海の　地「浪乃清くさの海

青楽　西乃海あをきか原乃波
間より顕れ出し住吉乃神すみ
よしの神すミよしの　あらわれ出
し住吉の　すみ吉乃神のちから
の　あらん程ハ　よも日本をハ随へさせ
給ハじ　すミやかに浦の波　立帰り給へ
楽天　すみよし現し給へく

伊勢石清水賀茂春日鹿嶋三嶋
諏方熱田安芸の厳嶋乃明神ハ
娑竭羅龍王の第三乃姫宮にて
海上にうかむて海青楽をまひ
給へハ八大龍王ハ八りんの曲を
そうし空海にかけりつゝまひ遊ふ
小忌ころもの手風神かせに吹もと

扨こそ唐舩の宝より漢土に帰り
至りし宝物の鏡や詳ときこそ宝物
かなや詳と君の代のうごかぬ國ぞ
ひさしき

寶藏

ワキサシ
抑西方ハ十萬億土を遠くも出離の道
なりしが宝を已身乃弥陀の國貴
賤群集乃称名の聲
乃法の場
同じく宝もまかせて拝まれ
捨てぬ
ちかひは頼もしき
獨りあみだ佛乃御名を尋ねたまふべく

かゝる縁ある法の場知るも志らぬも
心引結乃綱よるへきや知人も志ら
ぬ人も渡さんや彼国へゆく法の舟
浮むも安き道とかや　笙歌
遥に聞ゆ孤雲乃上聖衆来迎す
落日の前とあらたにやきくも又法
雲乃上てかくや鐘の音念仏乃声

のゆかしくはゆくへ聴聞もともへし
かりおさなきも居若き老若乃涙の
袖もつらぬ法の場よりあかるゝ声
や聴聞すきし一会称名の拝乃うちには
摂取の光明曇らねは老眼の通
路あれともつくめかあかしくを
ちらは居遠く此衆生まてまぬるま

しやうあるものは必　めつするに翁掛も
毎日乃称名に怠る事なし　かゝれハ
志乃者とみる家にぞおとらぬ海人まで人
のつとるべきなり　誰にもそりて行なり
せとしても皆人ハ不審しあへりき然ハ
おくとのほうを名号ハ　是ハ思ひも
よらぬ仰ゆゑ聞かなは何ハあ風さかる



鄙人あまきハ人かましやあかもありとも
こゝろ称名もしきあり唯上人ハ専修下向
偏に弥陀乃誓願あれハかうしこそあれ
ひきまして汎称名の時節に念仏申
ずまうさの浮木うらんまの花まちえ
たる心地こそ老の身にもおもしろく悦
ひの淵淡にあまるゝ御身ハ洗身あはう

安楽国に生まるゝ事かとよろこびの歓喜をと
なれ共よでん念妄執の閻浮の名をぞ
殘すかくなのこゝろの白髪ばへよと
こと翁の申所理り至極せり
なかさごろハびんきの白髪なれなるへ
しかもおとしが若殿ばらへ侮れ
あのそてハ叶ひましきと申たるを

いましく名の事へ 御らハ申前時
人もとのまゝれしへ さてかまへて名の事
ある 本より翁の流人のみな
やハあけぼ所とおもふハ人々をよるの
くらしぞみよりてなの事へ もと
長井の斎藤別当実盛ハ此まへりう
此合戦に討まぬ関ろなりわて社都の

扨それハ平家乃侍大将の名将を
軍物語ハ多く見えたり其名を
いやいやそれハ其実盛が洗ひし前なる
池水にて鬢鬚をも洗ひたれとある
されハこそ執心残りきるかハ今もしある
其の人にハまぼろしのごとく見ゆると
よハ備ともへよみしけり　深山

木乃其梢とハみえしかも桜ハ花
に顕れたる若木をうれしき涙をよ
かきや揚ぎ実盛の首をあらひける
語人乃方ハ思ふよ身乃上咲
きるかきれよ揚ぎたこと実盛の
其幽霊にてましますとか　秋実盛
の幽霊あるうちハ真逢によありかたり

既に此世をさりて 執心の
闇浮の世に 二百余歳の程ハふれども
うかみもやらで篠原の 池のあだ
浪よるともなく 昼ともわかで 心の闇の
夢ともなく 現ともなき 思ひをのミ
篠原の 草葉の霜の 翁さび人
なとがめそ仮初に あらはれ出たる実盛



が名を洩し給ふなよ なき世語もはづ
かしとて 御前を立去て行かと見れば
篠原の 池の辺にて 姿ハまほろしと
成て失にけり いざや別時の称
名にて 彼幽霊をとぶらはんと 篠原
の池の辺の 法の水 ふかくぞ頼
む称名の 声もろんつまたる 弔ひの功

夜より後は夜ゝ生るゝ道心も西へ行月の
光と共に曇りなき鉦をならして
夜もすから南無阿弥陀仏南無阿
弥陀仏　極楽世界にゆきぬれは
なかく苦界を越るとそ輪廻の古郷
隔ぬ歓喜の心いくはくそや所は
不退の所命は無量寿仏となる頼も
しや　念々相続する人は　念々毎に往
生をとく　南無といつは　即是帰命
あみたといつは　其行　此義をもつて
の故に　必も往生すへしと也
ありかたや　かくてやおまちあひ
たる池の面に影よりひよる翁をされは
かゝつる翁ある甲冑を帯するおもむき

きけよ　埋木の人しれぬ身としづ
めども心の池のいかさざ浪の昔
思の執心を浮べてたび給へとよ
是まよまのあらはるゝ姿を余
人に更に見えもせずもさて　只上人
のみ見ゆるは　みるや姿も跡の雲
むん鬢白き老武者なれ共　出

立ちまちやゝ成　粧ことこそをりあきさ
月の光　燈の影　闇のぬよるの
錦のひたゝれよぶく萌黄匂ひの鎧
きそ金作のたちかたな今はまゝくハ
これとても何か宝の池の蓮の臺こそ
たゞ成べきなれ常や影ぬる法の教へこそ
朽もせぬ金の言葉に多くのたへはおもしろ

有難くぞ聞し　一念弥陀仏
即滅無量罪則廻向発願心
頼もしや頼もしや　時もよくこそ逢
猶きし方のうきたびを懺悔の物語
扨も昔を忘れかねて思ふも似たる篠原
乃草の陰野乃露と消えし有様
語り申さん　扨も篠原乃合戦破
れしかば源氏乃方より手塚の太郎光盛
木曾殿の御前に参りて申すやう光盛
こそ奇異乃曲者と組んで首とつて候へ
大将かと見れば続く勢もなし又侍かと
思へば錦乃直垂を着たり名のれ名のれと
責むれども終に名のらず声は坂東声にて
候ふと申す木曾殿天晴長井の斎

藤別當實盛にてや有らん然らハ鬢
鬚の白髪たるへきか黒こそ不審なれ
樋口の次郎ハ見知りたるらんとて召れ
しかハ樋口参りたゝ一目みて涙をはら
はらとなかいてあなむざんやな斎藤
別當にて候ひけるそや實盛常に
申しゝハ六十に餘て軍をせハ若殿

原とあらそひて先をかけんも大人
けなし又老武者とて人々のあなと
らんも口惜かるへし鬢ひけを墨
に染めわかやき討死すへきよし常に
申しゝか誠に染て候洗はせて
御覧候へと申もあへす首をもち
御前を立てあたりなる池浪の

岸に臨みて水のみとりも陰うつる柳
乃糸の枝たれて　気はれては風
新柳の髪を梳り氷消ては波旧
苔の鬚をあらひて見れは墨は流
れおちて本乃白髪と成にけり
げに名を惜む弓取は誰もかくこそ
あるへけれやあらやさしやとて皆感

涙をそ流しける　又實盛か錦
の直垂をきる事私ならぬ望あり
實盛都を出し時宗盛公に申し古
郷へハ錦をきて帰るといへる本文
あり實盛生国は越前の者にて候
ひしか近年御領につけられて武蔵
の長井に居住仕り候き此度北国に

さだめて討死仕るべし
老後の思出是なるべし御免あれと
望みしかば赤地の錦の直垂を下し
たまはりぬ　然れば古歌にももみぢ
葉をわけつゝゆけば錦きて家に
帰ると人や見るらんと詠みしも此本
文の心なりさればにや古も朱買臣は

錦の袂を会稽山に翻し今の實
盛は名を北国の巷に揚げ隠れなかり
し弓取の名は末代に有明の月の
よもすがら懺悔の物語申さん
「さや
懺悔の物語心の水の底清く濁る
を残すな仇波の　「其執心の修羅
の道にめぐりくるこそ家を出で

まづしたくましも手塚めに隔てられ
志ざす實盛に組まであり つゞく兵誰々と
名のる中よりも先を争ふ手塚の太郎
實盛が郎等は主を討せじと中に
隔りて實盛と押ならべて組むを
あつぱれおのれは日本一の剛の者
と軍ぞよとて鞍の前輪に押
付て首かきゝつて捨てんげり
其後手塚の太郎實盛が弓手にまは
りて草摺をたゝみ揚て二刀さし
所をむずと組で二匹があひにどうど
と落けるが老武者の悲しさは
軍にはしつかれたり風にちゞめる枯木
の力もおれて手塚が下に成る所を

とゞ郎等は落あひて終に首をかゝさ
れてげりまして篠原の土となつて影
もかたちもなきあとの影も形も南
無阿弥陀仏弔ひてたび給へあと
とふらひてたび給へ

# 玉葛

平 是は諸国一見の僧にて候我此
程は南都に候ひて霊仏霊社残り
なくおがみめぐりて候又是より初瀬
まうでと志して候 あをによしやまとのなら
の宮柱古をとくとく思ひつゝ
行末は猶石上寺みつゝ行すぎぬれはむかしや

三輪の杉山本ハ是ハ程もなくながらを
何ゆゑと思ふまゝならぬ恋ハほどふる
初瀬川に早ては心猶よし来るやう
もろふかくハ程もなき舟の泊りや
初瀬川のほとりにたるきしのいはれ
紅人で神を今ぞ松ほ鳴れ浦まで
昔を思そて心なれきするいかへ

思ひそそしていさや白浪のよるべいつぞ
心乃月のかげならでそれぞとも
あし唯我ゆゑりみおさき棹も
袖の色よのうや暮てゆく秋の涙か
村時雨古川野辺のさびしくも
人やみるらん狂乃程も浮身の揖を
たえずあてかりき類ひなく

ワキ詞 ふしきやな此所は山川の流も早く
してさもみなぎるゝに底ひろしを
さしもはやき舟に棹さしたる人をさぞと見れは女なり
ぞもはや女はいかなる人にてましますぞ
女詞 是は此初瀬寺に詣でくる者なりけり
此川を所からげに流れて海に小舟
がつきを付と積をきる事に此鳥辺の
ワキ詞 江ふしあるまで不審はあるまじき迄さぞ
あゝ面白のことや我等もおぼえあるならば
初瀬とは古きいにしへの事を聞ものなるべし
去ながら其数ひとも浪に舟かけしく
謂のあるや覧 女 いや行手のそれは
そだち賢きよわが柄に 上哥 わか乃みて
色つく木々のきつきを山風にもうつ

みねも雲に月影も白みそめしほの
ぼりあ氣色もしかく行ければこゝろの詠め
近き顔色もや面白やの姿にて雲
つきぬ奥ありき谷なれどもまづわけ行を
絶えの霧ままに跡を夕ぞありけれしく
うちては堂よしまりつゞく鐘く
きんもまの哥あり空声のおもゝも妙

なるや紅葉の色まさる末に一本の
杉は見えずなりにけり　女白「見給へ一本れ
すきまく作人継ぎ隣え　僧「
二本の杉そてはひきうりや二本の
杉の立ちどを尋ねずは古川のべに君を
見ましやと詠じ續きし古哥
みしそ　女「是は深き旅の人

玉葛の内侍此はつせに詣て行しを
右近とこそや見奉りて嬉しき事あり
思ふよあられと思ひては跡をも継ひ
給ひ久 定や有し世をも祈り申さむ乃
露の身乃行方ふし跡ハ守くま行
あてしこの形見もなし あまた礼
思ひの玉葛かゝりてもいかにや知るへきし

心つくし乃このまの月やまちかねしよ
いたつらに鄙の住居のうきのこかれし
も絶ぬへきいのちを頼ませつる
人心乃あさき浪風もたちかへりて
色 うきよをわたれかまや舟よ棄をくれにと
松浦かい唐土船をさしてひとしよころそ
かゝる我ハうれしき鴻と漕到らくも

行方や何くとまりと白波よびこゑ乃
瀬もしらとさ思ひよさうる方もなしかくて
都の中とても我は浮ぶる舟のうち
おぼるゝやうきめを水鳥の陸よまどへる
こゝもてあつきもなるゝ身乃程を
思ひ歎きてゆきかふや世乃東の大和
路や唐土迄も聞ゆあるつきの寺よ

詣でつゝ年もへぬるのちかさりハ
初瀬山尾上乃鐘のよそまの音思ひ絶
み古の人よ二度かゝる本乃杉の立
ともまなれぬるかゝりのへと詠まるゝきよの
身の恥も打あすを思へ乃法乃衣裳
おぼしなハ玉音まよふひとを照し給へや
うきかゝる世の御語ぎきけハ涙もこぼり

江によそはるゝ身の哀れ　あはれ共
思ひはらさめよ初瀬門早くも知や法
かゝぬ縁によりぬ　こゝろえとく
円　みな頼もしよ法の人弔ひ給へ是
こそは浪の露の玉の名と名を露も
やみは成まじく　扨は玉葛の
内侍の顕れ給へるやどりぞ

華園にかくれ　照させけるめや日出
えそりく大慈大悲のちかひあるぞ法の
燈あきらかにあさきゆめさめやかにみる
ゆあく　變はるゝ事はあれはあそ
玉葛が成ちちを寿ぎまよひし
影くらくも法の教へに身にしみのぞびける
一筋によりまつはりて玉かつらのみづから

色ハきのふやゝくもかはらねど

我やさかりの面影よ　立やあらいあら

塵の身ハ　ちりぢりと執心の　あらき

闇路や　黒かみの　あらあらやいつのね

し　乱きりん　むしとむすれゆく思ひの悲

妄執の雲霧の迷ひもようや

うかりける人を初瀬の山おろしく

おちて露もあらそふとも散るよあまのは

の身も朽果ねうらめしや　うらみ

人をも世をも恨みし人をも世をも

思ひ出し限りあるの都ひれ悲や

数々のうさつよ立ても懺悔の[illegible]

あるひハわさか岩もるのの思ひかよ

むかしひかるひきこうもらんやえよりいる

八

面とみるまでつゆあれ蛍よみかれける
影もよしあしや愧しやと此妄執をひる
がへしけん如乃むかふる心ハ真如の
むかふあさ夢路ハ覚めにけり

## 柏崎

ワキ 夢路もうつゝ古郷にかへるや
うつ成らん 是ハ越後の国柏崎殿
の御内ニ小太郎と申者ニて候 扨も
頼奉りし人ハ訴訟乃為ニ在
鎌倉ニて候ひしが唯仮初乃
風の心地と仰ひて程なく空しく成

將又御子息花若殿も同道在鎌
倉にて候ひしが父御に別れを歎
き給ひつゝ左右なく遁世し給ひて候間
花若殿の御文と御筐の物を取添へ
只今故郷柏崎へと急候ほどに
〳〵日影も袖やぬれぬ旅衣ゆく
道は遠の末まで一通りすがら村時雨山
の内もくもる行は猶さへ増る憂き衣
氷の涙もうちそへて越路に早く着
きにけり〳〵急候程に故郷柏崎に着
て候先〳〵案内を申さうずるにて候
いかに案内申候鎌倉より小太郎がまいり
て候此由申候へ
シテ女詞 何小太郎とや
そ殿乃御ありつるか急ぎめづらし

や何とて面をやらさぬぞ　守宿　殿ハ見え
遁ハしまりて久しく成行と申上べきや
捨人便よ見てもわきまへ候ハん　女　あら
心えあやおもをいやはさめしと泣
梅花若の方よりまいりける　守宿　さん
候花若の段ハ御遁世にて候　女　何と
花若の遁世こそとて扨ハ父にあら

きるがおしの遁世をうらみしぞ
早　いやさ様々も御座なく候様々の御筆の
おもて持くまいりて候　女　何様その形見
とハ扨ハ花若が父の身まかりて
逆縁ながらその身も恐ろしく候も
嬉しかりつるよ筆をとりて書おき
ぼしやてもはかなきさてや御の仮初よ

音もなく猿てとらひし甚あしハ　昔
語りよもや叶く笛をみるより淚ありけれ
拙や家門の竹節ハいかりかすか宣
ひし妻く語りけりまセきあらく色
きひく慰まん　此ね郷の浦つを
覚束なく思召しば宗動さも人き札を
ひらかりよ浄宮狭ありし也　宮やさらそれ

松もひらめ三年隔く其後ハ我も流れ
名殘の世をりハ思ふべき　此理うと
思ひ入れ鏡をとめてわれしまし笛をも離
え宮や歎てもかひあらさ世をさしこれ
つきをみるうよもすがら淚ハきき有へを
祝道のはは文の伏覚をとけ縁え　掬も
住も交わる前痛りつきおも宿あく

むなしく成給へば心の中に思ひつゞけば唯思
ひやせ給へば我もゆりてはかな様なりしま
らを度さんと思ひ立ぬる修行の道なれ
やとあられやかりしとぞ心を便なく心
つよくもせよなり命難面くらく三年
がうつよ美へ下り様々の道をは経て
都のをと慰みたりしかせともひたるくての

恨めしや　扨も父の死去の子孫の
形見なるべきぞ　父の名をいかで忘れまし
悲しさ修行よせつる身のあはれとやはかなく
母を姿をみまゐらせんと思ふ心のあはれ
むかしめの我子や恨みし時は恨さ
あらぬもちりとては我子のゆかりの安穏
み守らせ給へ神仏と祈る心こそ哀れなく

僧 かやうに候者ハ信濃國善光寺の住僧
にて候又是に渡り候人ハいつくの人とも
しらず愚僧を頼み候程に師弟の契
約をなし此程出家させ申て候此間毎
日如来堂へ参り候今日も又参らはやと存候
シテ女 狂 是成童部を召具し
わらはも何かは狂ひつれし人とやうそて

やあ心ある人こそ訪ひて社まれ
それをいかにとかくに妻よりしおるゝ
唯獨是れ笠をとらへき子のゆくゑを
も白糸の 乱れ心や狂ふらん 
人の親の心は闇にあらねとも 誰か云きん
定めて其やよ思ひハあれはとも
讃しも聞やと思ふ心にしなれつゝ

思ふも偏よ妻や子のゆへと思へハ恨めしや
下丙
うきみハ行とおもふその柏崎をハ狂
ひ出て越路乃舟よ乗りしうハへく
めもかぬ我姿いつとしなよ乃ハつまと
せぞなぬ心ハあさ衣うちもろくしと行
程よ松風さそひきハ常盤乃里
乃夕くれや秋よたへつる気あらハ浅間
とぞ故よふもとてかしハ越への岸ゆ
乃里とりや昔も佐藤ぬ行た古屋の
あさのとつふハ思ひしよ桐乃花咲井の
上乃山ぞ東よ至りて西よ向へハ善光
寺乃門の前の正法如来乃狂乱ハ極貴ぬ
僧詞
さつてあし妻もよろうひしかあつしませ
めやよ狂女御堂乃内陣へハ叶つましきぞ

ゑさせ給へ　女同「極重悪人無他方便唯
称弥陀得生極楽とこそみえたれ　僧「是ハ
いかさまお狂かでもさ様に候へるをとハたり
教まるぞ　女「教ハ大乗みさ如来の御経
ひろくハましまさハや唯心の浄土と申
此宮洗善光寺乃如来堂の内陣社れ
極楽の九品上生乃うてなるよし女人の



まいるまじきとのいぶ制戒とハそもされハ
如来乃仁ありきるかよしへてハ行たハえ
拝法系へ南無阿弥陀仏　上同「頼もしやく
女「釈迦ハやり　弥陀ハ導く一筋にこゝを去
てかしこを見れハ西方極楽の上品上
生乃内陣よいざやまいらん光明遍照十
方乃極楽をもてなす此寺の常乃燈ハ法

頼もし長念仏もさへてとよ他念仏ハ頼もしや
女白 いつしか然来へしまらせ抱乃
作法ほしひられ念ずまし妻の筐
あれ若形見社今ハあだあれ見なくハ
惑く隣もあら伸しあせてよみしも
思ひ知きたり見せる数よ年へきて妻
乃たは生善前世も祈りしやと思ひ

篁いとしや此居士ほどの直なる主ハ萬
何事につけても面白からぬハ一物とや説
を討ちろへ手車欲乃道も去成
しよそハちよぞりあとの打節ハぞてくく
よ乱舞まふてみまんとてよろひ直衣に
おし袂もうろしきあひそへろぬう
とりて打ちつき二手拍子へようやさせて扇

あはれなる瀧の水 クリ 夫一念称名の
声の中には摂取の光明をまち聖衆来
迎の雲の上には九品蓮台の花ひらけて
地 異香満ちて人に薫じ白虹地に満ちて
つらなれり サシ 然るに世間の幻相を観ずる
に飛花落葉の風の前には有為の転変を悟り
寔に電光石火の影のうちには
生死の去来をみる事始めて驚くべき
にはあらねども一夜の夢もまどろまず
憂の親子のわかれ何の身もなき道
芝の露のうきたる身の置所 女 誠にさるは
悔し桜の首見しもうき世のあらひや
名地 悲しみの涙眼に遮りて思ひの煙胸にみつ
情見えと嬰ひるよ抄二家に流転して非人

凡の妄執の晴難き雲のちの月乃ふかき
や明き花真如平等の空にしらたにも
欲らんして煩悩のきづなに結ほされ
三毒の罪障乃山高く生死の海ふ
うかひとして流転生死を浮く
と言欲をもくる三業三口四意三乃
十の道おほかりき　嘆きのもし免

乃法ふも三密一心あり心外無法
心仏及衆生是三無差別何疑
念ふ念を弥陀乃浄土欲心の浄土
此へしは寿ぬへしは浄土の御池の蓮
のうへのちとなって菩提ならんに
影頼もちを力の助船にて彼の岸に至
道へし柳楽を極ぬき教あまこのまま

七重宝樹の品あれや。寶の池の水く
どくちの濱の真砂数の玉乃無量も
尽きの楽を極め量なき命の仏の名とや
誓の我が弥陀仏十方乃世界成へし本願
誤たずは今の我がかねてよりさ妻の
ゆくゑもと尋ね雲のたなびく山や西乃空の
の彼国に迎へつゝ紫に浄土の縁となり



さらば叶へ給へと称名も鐘の音も
暁かきて燈のかき消えてあかくや
南無歸命弥陀尊願ひを叶へ給へや
今ハ行ちかうつもりて見し法性花あり
と云ふもそれを深かり神子と申すこそ限
ありより遠ふる者計思ひの仰きり
物も云ふまや其よりわれと思ひの皆る

姿ハ墨染の「身ハしもあらぬなも言れ
女乃姿もうつゝなさ「狂人とゝひ
衰へとゝひ。衣よあさましく袂
よそ人の目やみをやよせらるゝ
きぬたの音とハみえてあをぬと砧や袂
見るとこれもや。顔ひもあさ。恥のやるや
子よあみ砧しりきし／＼

# 融

ワキ詞「是ハ東国方より出たる僧にて候
我未都を見ず候ほどに此度思ひ立
都に上り候 下歌 思ひたつ心ぞしるべ
雲を分舟路を渡り山を越て千里
も同し一足よ／＼ 上歌 夕を重ね
朝ごとの宿の名残も重なり

て都に早く着にけり

詞 急候程に是ははや都に着て候
所は六條河原の院とや申候暫休み
一見せばやと思候

一セイ 月もはや出汐になりて塩
竃の浦さび渡る気色かな

サシ 陸奥はいづくはあれど塩竃の恨
て渡る老が身のよるべもいさや定めなき

心もすめる水の面に照月なみをかぞ
ふればこよひぞ秋の最中なるげに
やうつせば塩竃の月も都の最中かな

下歌 秋は半ば身は既に老かさなりて

上歌 諸白髪雪とのみつもりぞ来ぬる年
月の春を迎へ秋をそへ時雨る
松の風までも我身のうへと汲てしる

塩汲衣袖さむき浦わの秋の夕かな

ワキ いかに是なる尉殿御身ハ此あたりの

人か シテ さん候此所の塩汲にて候 ワキ 不

思議や爰ハ海辺にてもなきに塩汲とハ

誤りたるか尉殿 シテ あら何ともなや扨

爰をバ何くとしろしめされて候ぞ

ワキ 此所をバ六條河原の院と承候へ

シテ 河原の院こそ塩竈の浦候よ融の大臣陸

奥の千賀の塩竈を都の内に移さ

れたる海辺なれバ名に流れたるかハら

の院のかハ水をもくめ池水をもくめ

爰塩竈の浦人なれバ塩汲となどおぼ

さぬぞや ワキ 実に陸奥の千賀の塩竈を

都の内に移されたる事承及て候

あれなるハ籬か嶋候か　シテ「さん候あれこそ
籬か嶋候よ融の大臣常ハ御舟をよ
せられ御酒宴の遊舞様々なりし所
そかしや月こそ出て候へ　ワキ「実々月の出
て候そや　あの籬か嶋の森の梢に鳥
の宿し囀りて　しもんに移る月影迄も
こしうに帰る身の上かと思ひ出られて候

何と只今の面前の景色か御僧の御身に
しらるゝとハ若賈嶋か言葉やらん
鳥ハ宿す池中の樹　ワキ「僧ハたゝく月下
の門　シテ「推も　ワキ「敲も　シテ「古人の心
今目前の秋暮にあり　実やいに
しへも月にハちかの塩竈の〳〵浦わの
秋もなかそとて松風も立なるや霧の

籬の島がくれに秋も立渡り昔の
跡を陸奥のちかの浦をながめしやち
かうきをあらめし　塩竈の浦を
都のうちにうつされたる謂をかたり候へ
嵯峨の天皇の御宇に融の大臣みちの
くのちかの塩竈の眺望を聞し召し及ばせ
給ひ此所に塩竈をうつしあの難
波の御津の浦よりも日毎に潮を汲
ませて塩を焼せつゝ一生御遊の便
とし給ふ然れども其後は相続して翫ぶ
人もなければ浦はそのまゝ干潮と
なつて池辺に淀むたまり水は雨
の残りの古き江に落葉散り浮く松
蔭の月だにすまで秋風の音の

猶る討ありされハ平家よりしも君まさらく
煙絶にし堀江乃浦も淋しさもみし浪ら
我と貫之もありめられ　宗や詠
むすきハ月乃みてよる堀かまの浦淋しき
も荒てる浪の世をも去ましても若
の浪をたつるや賤か荒音響しや寒
やしともはてへとも歎きたかひもあさ

はの浦千鳥ちとりの鳴わりありく
めやよ射殿みしりたる山にハ皆名
所よそをも作流也をも入色　当よし
皆と所よそしんだ寺人教とよへし　先
あきよみしるハ音羽山作ら　はんし作
あき法音羽山ひよ　音羽山音よやをつく
逢坂乃関のこなたと後くれハ逢坂山ぞ

程ちかうこそ候らめ　シテ「仰のごとく関乃こなた
とハ読たれどもかなたにあたれば逢
坂の山ハ音羽乃峯にかくれて此辺
よりハ見えぬなり　ワキ「扨々音羽の峯つゞき
次第々々乃山並乃名所々々を語り給へ
シテ「語りも尽さじ言の葉の哥の中山清
閑寺今熊野とハあれぞかし　ワキ「扨其末に
続きたる里一村乃森の木立
シテ「それをしるべに御覧ぜよまだき時雨乃
秋なれバ紅葉も青き稲荷山　ワキ「風も
暮行雲乃はの梢も青き秋の色
シテ「今こそ秋よ名にしおふ春ハ花見し
藤の森　ワキ「緑の空も陰青き野山に
つゞく里ハいかに　シテ「あれこそ夕されバ

野への秋風身にしみて鶉鳴なる
深草山よ木幡山伏見の竹田淀鳥羽
もみぢ葉や詠めやる方は雲居の空
白雲のはや暮そむる遠山の嶺も木
深く見えたるはいかなる人のすみかなるらん
大はらや小塩乃山もけふこそは神代の
ことも思ひ出らめ思ひ出給へや

きても秋の風吹方あきや峯つゞき西
こえゆる行くそ秋も早半かな
紅葉の尾乃嵐山もみぢあり嵐そ行
秋の夜の空も澄める月影よさりとは
塩竃もあるとて陰もなく照月よめで
思ふ事言はでそ身をとやきよ心なり
秋のよの物語よしあやまついざや

塩をくまんとて持や田子乃浦あづまからげ
の塩衣くめハ月をも袖にもち塩の
汀よ帰る浪乃よるの海人と人やみるらん
塩曇よかき紛まきれて跡もミえす
跡をもみえすなりにけり　磯枕苔乃衣
をかたしきて岩根の床よ夜もすから
なほも奇特をみるやとて夢待皃の
旅寝かな　忘れて年をへし物を
又いにしへよ帰る浪の満つ塩竈の浦人
の今宵の月を陸奥乃ちかの浦わも
遠き世よ其名を残す大臣融の大臣とハ
我事也　我塩竈の浦よ心をよせあの
まかきか嶋の松陰よ明月よ舟を浮め
月宮殿乃白衣の袂も三五夜中の新

月の色ぢからふるや雪をも白く雲の袖
さえや桂の枝まよ　花を花とぞ見る
拍ひ　家も名に立白河の浪て荒海
白や曲水の盃うきたりし遊舞の袖
あゝ面白の遊楽やとても明月の其中
まだ初月の霄にも影も姿もなく
あさいめ成謂ある殿ん　先は西山にまよ入日
景いまぞ遊ぎされば陸歌よくけるくだとも六
月の方ほそほまれうもさうてとくあり
青陽の春の始め　霞む夕の遠山
偃乃色も三日月の影を舟にもたとへ
うり又水中の遊魚ま釣と疑ふ
雲上の鳥は弓の隠とも踏さく　一輪
も降らん万水もよろしん　鳥ハ惑ひる

の樹に宿し　魚ハ月下乃波にふす

地　きくともあかし秋乃夜乃　鳥もなき

地　鐘もきこえて　月もはや　影かたむきて

明方乃雲となり雨となる此光陰によりそ

ハれて月の都に入給ふよそほひあら

名残おしの面影やなこりおしの面影

右之本者観世太夫織部
章句眞本令版行畢
正徳六丙申歳弥生
天保十一庚子歳孟春改正再板
皇都二条通御幸町西江入町
山本長兵衛